

認知症医療を取り巻く変化

片岡仁美

京都大学医学部医学教育・国際化推進センター

認知症の特集を組ま
認せていただくこと
になり、京都大学の木下
彩栄先生に共同企画をお
願いした。木下先生に専
門家の立場から貴重なご
示唆とご執筆者の推薦を



いただいて構成した本特集は、認知症診療の最新の知見を網羅した必読の内容であると考えている。木下先生およびご執筆者の先生方に厚く御礼を申し上げたい。

認知症の診療に苦手があった。患者さんとのコミュニケーションが容易ではなく、ご本人を理解するよりご家族の困りごとに対応する比重が自然に増え、しかも有効な手立てが限られている。

そんな中ユマニチュードに出会ったことは一つの転機であり、福音でもあった。しかし、記憶という目に見えないものが失われる辛さはなかなか理解が及ばない。ある患者さんが認知症の進行に伴い「色がわからなくなっている」ことに気が付いた瞬間があった。その方は以前繊細な植物画を絶妙な色遣いで描いていた。しかし今、塗り絵の色遣いから色覚異常の進行に気づいた。色鉛筆を前にして逡巡している姿を見て、好きだったからと差し出した塗り絵が、本人にとっては「わからないことを突きつけられる」残酷なことであったことも認識した。機能だけでなくその人らしさの一部を喪失することだと実感するとともに、「見える」形でなければ深く感じるができなかった自分の至らなさを悔いた。

認知症診療は自身にとって取り組むべき大きな課題だ。一方で、機能や後天的に獲得したものを失っていても最後まで残る根源的なその人の本質、愛情やあたたかさを実感するに至り、その意味をもっと汲み取りたいと願う。 

木下彩栄

京都大学大学院医学研究科在宅医療・認知症学



2023年以降、認知症診療は「対症療法中心の時代」から、「早期診断・疾患修飾・予防」を重視する時代へと大きく転換した。その最大の契機は、抗アミロイドβ抗体の登場である。これは Alzheimer

病(AD)の根本病態に関与するアミロイドβを除去し、認知機能低下の進行を抑制する初めての実用的な薬剤であり、認知症診療に「治療可能性」という新たな概念をもたらした。

この変化に伴い、診療体制も大きく変わった。従来より一段階前の軽度認知障害(MCI)の時期からの治療開始が可能になったことにより、患者さんへの説明や意思決定支援、かかりつけ医との連携に大きな変化が生じている。

さらに近年は、「予防」への関心が急速に高まっている。生活習慣への介入が進行抑制に寄与することが明らかになり、認知症診療は、専門医だけでなく、地域医療、生活習慣病管理、公衆衛生と連携した「ライフコース全体のシームレスな医療」へと拡大している。

このように、認知症診療は、「認知症になってから支える医療」から、「早期に診断し、進行を抑制し、予防しながら認知症の人の生活を社会全体で支える医療」へと大きく変革している。

こうした認知症医療の進展の一方で、高額な薬剤費、地域格差、専門人材不足、治療適応判断などの課題も顕在化し、認知症に対するスティグマから治療の遅れも生じている。

本特集では、このような最近の認知症医療を取り巻く変化を、第一線の先生方にわかりやすく解説していただくことを企図した。 